



小林茂夫名誉教授逝去

小林茂夫名誉教授は平成11年7月19日午前9時9分、病氣療養中のところ、肺炎のため、日本医科大学附属病院で死去されました。享年73才。大田区密蔵院にて営まれた通夜、告別式には本学関係者ばかりでなく、全国各界からの多数の参列者が訪れ、故人の冥福を祈った。

小林茂夫名誉教授は大正15年4月1日、茨城県に生まれ、昭和22年3月東京医学歯学専門学校歯学科を卒業した。東京医科歯科大学助教授、日本医科大学の助教授を経て、昭和41年7月新潟大学歯学部教授（口腔解剖学第二講座担当）に就任し、平成2年3月新潟大学を退官した。この間、小林茂夫先生は昭和42年7月、歯学部長に選出され、その後4期8年にわたり歯学部長を併任、評議員を4期6年3月間併任、附属図書館旭町分館長を7月間併任し、大学の管理・運営に尽くしたことにより、平成2年5月新潟大学名誉教授の称号が

授与された。また、昭和48年8月より6年8月間、大学設置審議会専門委員（大学設置分科会）に任命され、昭和63年5月より2年間、文部省高等教育局歯学視学委員に任命され、文部行政に大きく貢献した。新潟大学退官後は、平成2年4月から平成11年3月まで、3期9年にわたり、学校法人松本歯科大学学長として、同大学の管理・運営に当たった。

小林茂夫先生から薫陶を受けたものは多く、多数の後継者を育てられた。新潟大学歯学部口腔解剖学第二講座に在籍し、現在、全国の歯学部口腔解剖学講座の教授、助教授として活躍しているものは、矢嶋俊彦、吉田重光、脇田稔、小澤英浩、前田健康、高野吉郎、井上勝博（以上教授）、山本恒之、大島勇人（以上助教授）の9名にのぼる。

これら生前の功績により、平成11年7月19日正四位勲三等旭日中授章が授与された。



追 悼

歯学部長 花 田 晃 治

7月19日、新潟大学名誉教授、元歯学部長、小林茂夫先生のご逝去の訃報に接し、ただただ驚きました。松本歯科大学長の要職を勇退され、東京のご自宅で悠々自適の生活を始められたとお聞きしていましたのに。

昭和30年代までは日本海側には歯科医学教育機関はありませんでした。そこで医学部教授会では歯学部設置を決定し、歯学部設置促進委員会、歯学部設置期成同盟会の努力を経て、昭和40年4月1日、歯学部が設立されました。そこで小林茂夫先生は、歯学部創設のためのすべての仕事に当たるために、昭和41年7月1日に口腔解剖学第二講座教授として発令され着任されました。創設から二代の歯学部長は医学部長の併任でしたが、昭和42年6月12日に第一回歯学部教授会が開催され、続いて6月23日開催の教授会において制定された歯学部長候補者選考規程に基づき、歯学部長候補者の選考が行われ、7月16日に小林茂夫先生が歯学部内から初めての専任第一代の歯学部長に就任されました。この間にあって小林茂夫先生が果たされたご功績は、歯学部規程の制定、講座の開設、教授会の発足、カリキュラム編成、専門課程教育の開始、医学部病棟・診療室借用およびプレハブ棟新築による研究室の整備、講堂・実習室借用による教育設備の整備など非常に多くにのぼりました。まさに小林茂夫先生はこの新潟大学歯学部を創りあげるためにご自身のすべての時間をそそぎ込まれたと言っても過言ではありません。さらに

は昭和54年からの二期、昭和60年からの一期も歯学部長を務められました。小林茂夫先生の献身的なご努力によって創立された礎の上に、今、新潟大学歯学部は着々と伝統を築きつつあります。

小林茂夫先生は教育者としてもきびしいなかに暖かみ、温もりのある姿勢で学生に接しておられたことから、ほとんどすべての学生および卒業生から長く慕われてきました。全国各地で活躍する卒業生は、多くの同窓会支部を結成するとともに地域・歯科医師会での要職をしめるまでに成長、発展しています。先生のをしたって教育者の道に進んでいる数多くの卒業生が全国にいますし、新潟大学歯学部にあっても卒業生の教授をはじめとする優秀な教官が着々と育っています。

私も病院長時代に歯学部長であられた小林先生と一緒に、保存・補綴実習室、病理組織実習室の整備のためにご一緒させていただきました。そのなかで教育には情熱を持った教官と優秀な設備が必要であるという先生の信念を学ばせていただきました。

小林茂夫先生が新潟の地にまかれた種は、見事に開花し、実りを得て希望に満ちた21世紀を迎えようとしています。その姿をご覧になることなく、どうして急がれたのですか。しかしながら、小林茂夫先生は新潟大学歯学部の構成員一人一人のなかに生き続けています。

小林茂夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

故小林茂夫名誉教授のご逝去を悼んで

口腔解剖学第一講座 小澤英浩

「巨星落つ」、小林先生のご逝去の知らせを受けた時、真っ先に脳裏をよぎったのはこの言葉であった。お亡くなりになる2週間位前に矢嶋教授（北海道医療大学）、高野教授（医科歯科大学）と3人で、日本医大の病室へお見舞いに伺ったが、その時はすでに意識がなく、我々の呼びかけにもお応えはなかった。近い内にきっとまたお元気な姿に戻られると信じ病院を後にしたが、あの時が先生との最後の出会いであり、またお別れの時でもあった。それにしても余りに急なご逝去であった。

私は、昭和42年、本学歯学部が創設されてまもなく小林教授に呼ばれ、昭和48年まで助教授として勤め、以来今日にいたるまで恩師の一人として教えを賜ってきた。私が助教授としてご一緒した時期は、小林先生は学部長として本学部を立ち上げるために日夜ご奔走され、特に、昭和43～45年にかけては大学紛争の渦中であって、心身共に大変なご苦労をなさったことを記憶している。大学移転問題で、白紙撤回を余儀なくされた時は、涙を流されて悔しがったお姿が今でも鮮明に思いだされる。

8年4期に亘り学部長をお勤めになった小林先

生は、ほとんどの時間を学部・大学運営に費やしておられたが、その間を縫って熱心に学部教育に当たられ、その教え・薫陶を受けて育った卒業生からは多くの逸材を輩出している。

松本歯科大学へ移られてからも、学長会議などでお会いすると、いつも変わらぬ笑顔で話しかけられ、雑談の中でも一言二言的を得たお話をして頂いたことが誠に懐かしく思い出される。

私にとっては良き親父の一人として、掛け替えのない存在であった小林先生が今や黄泉の人となられてしまわれた。一昨年実の親父を亡くした直後でもあり、私の人生に大きな穴がポツカリと開いてしまったようで、糸の切れた凧のようにおぼつかない心境でもある。

お亡くなりになる前に差し上げた手紙には、これからの歯学・歯科大学の行く末についてのご意見をお尋ねする内容も含まれていた。混沌としカオスのような状態に追い込まれつつある我が国の教育行政を目の当たりにしている現在、良き指導者としての先生を失ったことは歯科医学界にとって誠に大きな痛手である。

心からのご冥福をお祈り申し上げます。合掌